

日本の映画もう一つのヌベルバグ

今日、アジアの映画は現代の映画の中で新しい風を吹かせているようだ。

けれども、日本の場合は独特だ。なるほど、日本の映画はいつも作品について常任だった。能の芝居に起原を持つ。日本の映画のリズムはとても特殊なのでそれに入り込むことは簡単ではないと思われる。戦後、初めに黒澤明(彼は「影武者」という1980のカンヌフェスティバルで遅く^{ねぎら} 労^{みぞぐちけんじ} われた)、溝口健二(封建の時代に^{ちやくそう} 着想を得る)日本の映画に高潔の文字を与えただけでなく、50/60年代の天才的な小津安二郎の物語内容的なミニマリズムに似せて古典的なスタイルも課した。彼はとりわけ見事な「さんまの味」(1962年制作)の映画監督だった。その映画監督は作品によって本当の映画の文法を作り出した。その映画の法則はある^{そんぞく} 存続の^{がいねん} 概念に至る。

しかしながら、60年代か70年代頃「ヌーベルバーグ」と呼ばれる時代だった。ある映画監督が伝統的なフォルマリズムから敢えて出るようになる。もう一つの映画の次元発展させる^{おしまなぎさ} 大島渚の作品の現代性が考えるだろう。彼の見方から、映画は社交の^{ひょうろん} 評論のようだとする。まず、醜聞「青春残酷物語」は。その映画で、レイプの見物人だ。次いで、「愛のコリーダ」。その映画は日本的なセックスを語る。当時の日本の政府の^{せいふ} 弾劾のため^{だんがい} に大勢の日本人は外国に行って「愛のコリーダ」を見なければいけなかった。

現代に、日本は映画を^{きき} 危機の^{ないは} アートにさせる。それは見事に自分の内破の犠牲者のである^{ぎせいしゃ} 病んだな社会の^{かがみ} 鏡になった。心配や^{よつきゅうふまん} 欲求不満に^{おとし} 陥れた^{こじん} 個人の^{そがい} 疎外の^{けっか} 結果を^{えが} 画く。ですから、すべての社会の^{あく} 悪ので^{とうぜんこくさい} 当然国際的^{せいこう} 成功をしている。